

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

# （近刊著書紹介）大島勇人・浜島幸司・清野雄多著 『学生支援に求められる条件 学生支援GPの実践と 新しい学びのかたち』

著者	浜島 幸司
雑誌名	The Basis : 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 紀要
号	5
ページ	263-264
発行年	2015-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00000528/">http://id.nii.ac.jp/1419/00000528/</a>

(近刊著書紹介)

## 『学生支援に求められる条件——学生支援GPの実践と新しい学びのかたち』

(大島勇人・浜島幸司・清野雄多著、東信堂、2013年10月刊)

浜島 幸司

本書は、文部科学省が公募した事業（「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」）を採択した新潟大学での実践について、著者たちがおこなった振り返りをまとめたものである。本事業の公募は2007年夏に開始され、審査・採択を経て、実際に学生が活動した期間は2007年末から2011年3月までである（なお、学生支援GP終了後も、大学独自の学生支援プログラムとして、2014年12月の現在も継続されている）。

学生支援GP期間が終わった2011年4月に著者3名で集まる機会を持った。3名に共通した問い「この学生支援GPの取組とは一体何だったのか」に対して、各自の経験をもとにした振り返りと、自由な意見交換をおこなった。この一度の集まりでは納得した解答を得ることができず、集まりは定期的なものになった。継続して議論を重ね、1年が過ぎたころ、この振り返りを出版という形で世に問おうということになった。学生支援GP期間終了から2年半を経た2013年10月に東信堂の下田社長の協力もあって、出版することができた。

著者3名の間で何度も次のことを確認した。今回の学生支援GPによる取組を、自らの経験を踏まえ、結果の一部を表層的に取り上げるのではなく、本来であれば見せる必要のない部分もあえて記載し、多面的な内容として後世に残す。それが本事業を支えた納税者である国民に対する著者らの責任だと考えた。本書の目次と執筆者は、下記のとおりである。

はしがき：大学の大衆化と学生支援GP

第1部：企画者から見た学生支援（大島勇人：第1章から第3章を担当）

第1章 学生支援GPが学生の人間の成長にいかに関与できるのか

第2章 学生支援GPの実践を通して得られた成果

第3章 学生支援GPの実践を通して見えてきた問題点

第2部：管理運営・現場監督者から見た学生支援（浜島幸司：第4章から第7章を担当）

第4章 私が学生支援GP管理運営者になるまで

第5章 学生支援GP管理運営者の混乱

第6章 学生支援GP実践の成果

第7章 学生支援GPを経て残された課題

第3部：参加者から見た学生支援（清野雄多：第8章から第11章を担当）

第8章 全力疾走の期間

第9章 学生支援GPの現実

第10章 チーム解体

## 第11章 振り返って思うこと

### 終章 学生支援に必要な条件（浜島幸司・大島勇人・清野雄多）

本学生支援 GP で果たした3名の役割は、それぞれ異なっている。大島勇人氏は初代の学生支援部門長として、責任ある立場として関わった。清野雄多氏は第1期の参加学生として、学生支援 GP に1年次から4年次まで関わった。私は、学生支援部門の任期付専任教員として、プログラムの管理運営・現場監督者として関わった。たとえ同じ時間を共有したとしても、関わる立場が異なれば、見える世界も異なる。もちろん、評価も異なる。それを本書で丁寧に描きたかった。所詮、著者3名の振り返りも、学生 GP 期間内での小さな経験にすぎない。事実は無数に存在する。限界を感じながらも、読者へ学生支援 GP の経験を伝えたかった。

本書で主張したかったことは、終章「学生支援に必要な条件」に示している。著者3名の立場は、それぞれが学生支援 GP に関わってみたものの全体の歯車は噛み合わず、個人として手応えを感じる一歩手前で終わったというものである。それを軌道修正させるためには、本書で示す「ビジョン、ミッション、バリュー」を策定し、学生支援 GP に関わる人々全員に共有してもらうことであったと気づく。関わる人に理解できる内容で「ビジョン、ミッション、バリュー」を描き、意識や行動に結びつけたかった。本来であれば、これは学生支援 GP 採択時に用意できていなければならないものである。最初の躓きが、最後まで影響した。軌道修正すべきはずのプログラム実行側にいた大島部門長・任期付専任教員の私には、「ビジョン、ミッション、バリュー」を提示し、推し進める力がなかった。ゆえに多くの参加学生・教職員・地域の皆様に迷惑をかけることになった。学生支援 GP 期間中に6つの活動グループが解散した。「失敗」から得たものも多いが、代償も大きかった。

私は、「第2部：管理運営・現場監督者から見た学生支援（第4章から第7章）」を担当した。大学院での長い研究者予備軍を経ての就職による任期付専任教員としての戸惑い、学生支援 GP への抵抗勢力とのやりとり、課外活動の魅力を学生たちにどのように伝えたらよいかといった葛藤などを記した。学生支援 GP の実務を肅々とこなすことだけを求められた任期付新参者から見た、地方国立大学に根差す教員文化と職員文化のありようを私自身の経験を題材として、参与観察した結果でもある。担当章には、依拠する理論も、仮説モデルも、数値も出てこない。私自身の「経験」と、そこで感じた「思い」をデータとして用意することに徹した。葛藤の連続だった。私は学生支援を通じて、参加学生に大学への「愛着」を持ってもらいたかった。しかし、管理運営・現場監督者である私に「愛着」がなかった。このジレンマを解消したくとも、最後までできなかった。このデータを学術的にどのように活かしていくのか。これが本書刊行後の私自身の課題であり、この先も背負い続けていく。

私は本書刊行の半年前に職場を変えた。再び研究に戻ることができ、成果を発表する機会にも恵まれた。今では学生支援 GP の管理運営・現場監督者の経験が活かしている。幸運にも私は大学教育の現場に関わることが許されている。本学生支援 GP に協力いただいたすべての人に感謝したい。本書が学生支援 GP とその実践を知る機会の提供になればと願う。